

子供と向き合い、現場から生まれた知恵

—橋詰先生インタビュー—

第3回 王道はあるが、王道だけでは救えない

第2回では、口コミで広がった教育相談の日々と、保護者とともに歩んだ支援の実態についてお聞きしました。第3回は、多くのケース経験から生まれた橋詰先生の指導観の核心に迫ります。「試す」ことへのマインド、子供と一緒に作り上げる指導の在り方、そしてオンデマンド研修への全国からの反響についてご紹介します。

1 試行錯誤から「見えてくるもの」

【佐藤】

在籍する子供の減少が続き、盲学校の現場で多くのケースを経験することが難しくなりました。私たちは、それを補うために、橋詰先生が指導現場で培ってきた専門性を、デジタル技術を活用して伝えていきたいと考えています。

【橋詰先生】

やはり多くのケースを経験できたというのは、その中でいろいろなことを試せたということです。ノウハウがたまれば、「こういう子にはこう」とだんだん見えてくるものがありました。

【橋詰先生】

一番大切なのは、教員が子供の様子をよく見て、それに対して何ができるかということを試せるかどうかなんです。「絶対にこれがあればうまくいく」というのではなく、いろいろ試し、子供と対話しながら一緒に作っていくことが大切なんだと思います。王道もあるんですが、王道で全ての子供が救われるわけではない。救われたとしてもまだ完璧ではなかったりするので、少し手直しをしたり、子供用にカスタマイズしていく。やはりそれが基本じゃないかということ学びました。

2 「試す」マインドを持つことが一番

【橋詰先生】

時間がなくて難しいのは確かなんですが、少しでもそういうマインドがあれば、試行錯誤できると思うんです。市販のものだったりネット上の教材でも、「少し探したら、もしかしてこれが使えるかもしれない」と工夫してみる。そういう気持ちを持つことが一番なんじゃないかなと思います。

【橋詰先生】

教員が子供に「頑張れ」と強いるのではなく、教員が頑張ろうと。そして、子供が思わず頑張ってしまう—そのような方法を探してあげられるかという視点ですね。

【佐藤】

先生の講習を受けて、工夫することの大切さやそのマインドを学んだという人が多くいらっしゃいました。

【橋詰先生】

この辺りは、私たちは研究者ではないという思いがあります。現場で地べたを這いずり回っていろいろなことをやるのが仕事であり、子供と向き合っていくのが基本だろうと思っています。

▶ 「這いずり回る」という橋詰先生の言葉には、理論よりも目の前の子供と格闘する現場教師の矜持が込められています。この姿勢こそが、多くの先生方の心に響いた理由のひとつでしょう。

3 全国からの反響—オンデマンド研修に寄せられた声

【小松先生】

今回、オンデマンド研修の動画は 158 人のご利用があり、再生回数が 250 回ほど、そして 60 名の方から非常に熱いアンケートをいただきました。橋詰先生、この熱いお声に対してどのような感想を持たれましたか？

【橋詰先生】

とてもうれしかったですね。自分がやってきたことが皆さんの役に立つんだということが分かって、すごく励みになります。しかも、皆さんが私が本当に伝えたかったことをきちんと読み取って書いてくださっているのが非常にうれしかったです。

【小松先生】

今年度、弱視児の担当になっていろいろ悩んでいた中で、「橋詰先生の動画にすごく救われた」「こういうふうに資料を使えばいいのかが分かった」という声を数名からいただきました。

【橋詰先生】

めちゃくちゃうれしいですね。子供とどう向き合うかというのが一番大事なので、そのことを知ってもらえたことが一番うれしいですね。

【小松先生】

何年か経験のある先生方からも、資料の調べ方や自分なりの発展のさせ方が分かったというお声がありました。最初は 1 名の先生から始まり、そこから口コミで同じ学校内でどんどん広がっていくなど、全国の学校に広がっていく様子を感じて、すごく感動的な 4 週間でした。ありがとうございました。

【橋詰先生】

こちらこそ。私の実践が人の役に立てるなんてとてもうれしいです。視覚認知や読字・書字といった狭い分野の指導をたくさんやってきて、そこに特化したノウハウが私の中に蓄積されました。今は知的障害のない弱視のお子さんとはそれほど多くありませんから、その指導経験を皆さんに生かしてもらえるとというのはうれしいですね。

▶ 研修動画の利用者 158 名・再生 250 回・アンケート 60 件という数字は、この分野の専門的ニーズの大きさを示しています。一人の教師の「這いずり回った」経験が、着実に全国に届けられています。

◆ 次回予告（第 4 回・最終回）

最終回は「専門性を継承し、地域へ返す—これからの展望—」をお届けします。橋詰先生の知見を AI ツールとして継承する取組、今後の研修の形、そして「盲学校から地域へ還元する」という使命についてお聞きます。

インタビュー構成：北海道札幌視覚支援学校 小松太一郎・佐藤暢洋